

『凱陣八島』作者考

神田 やす子

序 章

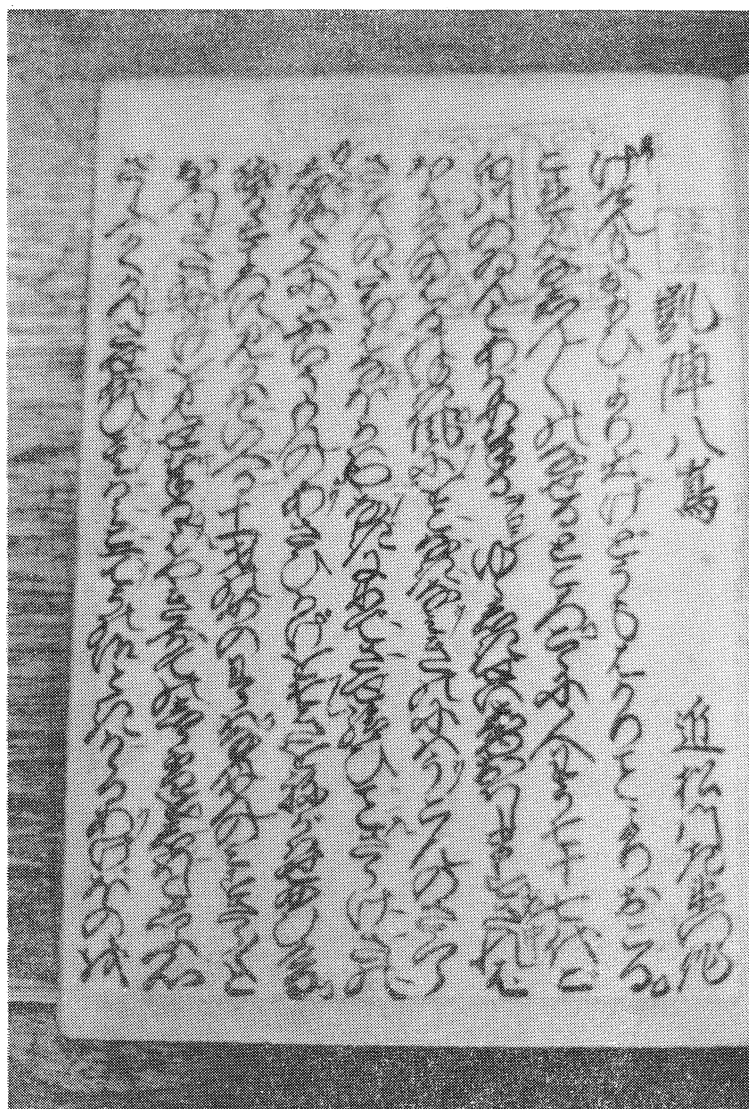
『凱陣八島』は、浄瑠璃本に作者が署名するようになる以前に成立した作品で、正本自体からは作者を知ることができない。そこで必要となるのが、関係文献や歴史的な資料等による外部的な考察であるが、『凱陣八島』の場合は、これによって二通りの解釈が得られるのである。すなわち『今昔操年代記』によるところの西鶴^{〔注1〕}説と、正本の署名による近松説^{〔注2〕}であり、それぞれ起因に関する問題を除けば両説共に譲らず、論争にまで発展したのであった。

こうした問題は決定的な資料の発見でもない限り、

確証を得ることは不可能に等しく、今回の研究だけでは作者を決定付けることはとうてい無理なので、まずは作者論争のもとである近松、西鶴両説の起因について見直すことから始め、その後内容の具体的な考察に入っていくかと思う。但し、内容についてはまだまだ研究を重ねて行く必要があり、今後の課題を示す程度にとどまっている。

第一章 近松説——在名本考察

『凱陣八島』の諸版の中でいわゆる在名本と言われているのは、鶴屋喜右衛門板の十行三十丁近松在名本のことで、内題に「凱陣八島 近松門左衛門作」とあ



早大演劇博物館蔵板本（表Ⅲ⑤—⑥）

る。

最初にこれに着目して近松作と断を下したのは、明治の饗庭篁村氏であった。なにしろ版本にはっきり署名が印刷されているのであるから、近松研究家にとっては非常に力強い物的証拠を得たことになり、これを根拠に『凱陣八島』近松作説を論ずる様になったのであった。

しかし昭和に入ってから、書誌的な見地に立った具体的な諸版論究が行なわれ^(註3)、その結果鶴屋板の十行本が初演当時を推測するには信を置くに足らないものであるとの見解が示されたのである。今日ではこれに従い鶴屋板を作者推定の論拠とは認めなくなっている。

以下、諸版を一通り整理し(表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)、鶴屋板の正本が如何なるものかをまとめておく。

- 諸版のうち鶴屋板のみに見られる特徴を次にあげる。
- (1) 内題に作者近松の名が見られる。
 - (2) 諸版のうち鶴屋関係の正本の奥書はみな「初心稽古」の形式である。
 - (3) 書肆の住所に初めて「江戸」が登場した。
 - (4) 同系統の正本が三種類も伝わっており、かな

りの好評を窺わせる。

- (5) 内容に変化が認められる。

。係結び「こそくけれ」が「こそくけり」になっている。但し段末のみに見られる。

。文字の異同 後白河のゐん↓後白川のゐん等。

奥書「初心稽古」の形式で、書肆の住所に江戸の記載が見られるということは享保に入ってから再版と思われ、他の諸版よりかなり新しいものであることがわかる。これは内容の変化を見ても裏付けられよう。

又「近松門左衛門」の署名については、柳亭種彦が「近松作とするさうれば本のうれかたあしきにより……名をのせたる奥書をいづれへもつけて売シものなれば」^(註4)と言っている様に、『凱陣八島』に限らず商品化した浄瑠璃本にはほとんどすべて、売上げ向上の為に当然売れるとわかっている「近松」の名を使ったのであってそこには本の内容に対して深い考察があったとは思われない。こうしたことは、実際に鶴屋板の同じ系統の本が約三種類八件余今に伝わっている事実からも、署名「近松門左衛門」の威力を窺い知ることができよう。

結局鶴屋板の近松在名本は、成立が享保年間とみられ初演（貞享二年）から四十年近くを経ていることからしても初演当時の事実を伝えているとは思われず、更にその署名も正本販売上の利害問題が絡んだものであった訳であるから、このようなあいまいな正本のしかも事実無根の作者を根拠とした『凱陣八島』近松作説は早々に論議からはずされるべきだと確信した次第である。

第二章 西鶴説——『今昔操年代記』 と『小竹集』考察

西澤一風の『今昔操年代記』（享保十二年刊、以後は『操年代記』とのみ記す）は、『凱陣八島』について述べた文献として最も古いものであらうと言われている。それには初演当時の様子が次のように記されている。

其明寅の年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて、西鶴作の浄るり、暦といふをかたられければ、義太夫方には賢女手習並新暦として両家はりあい、ついに義太夫浄るりよく、嘉太夫がた止め

其次のかはりかいぢん八嶋、是も西鶴作にて評判よき最中出火して、加賀掾は是限にして京へのほられ……義太夫寅の年二の替りは、近松に縁をもとめ、出世景清といへるをこしらへ、是にて月を重ね云々これによると『凱陣八島』は、西鶴の手になることが窺われる。この西鶴説に始まって『柳亭浄瑠璃本目録』『声曲類纂』（注⁵）等がこれに続いた。以後西鶴研究家達は、

近松と同年で、大阪の正本屋で、作者でもあり、近松とも親交があり、近松を「作者の氏神」と言ってほめてゐる西澤が……凱陣八島は西鶴の作だと明記してゐるのであるから、よほど重大な反證の出ない限り、やはり西澤説に従はねばならない。（注⁶）との考えから『操年代記』を無二のものとし、あくまでも西鶴説を主張したのである。

確かに西澤一風という人物の生活状況を考えて、記載されている事件はほとんど実際に目撃したものか、或いはその評判を聞いているものであらうと思われ、当時の様子を知る上で最も信頼すべき資料と成り得るものではあると思う。しかし、いくら当事者であったとしても執筆したのが七十五才の時というのは記憶違いもあったらうし、事件当時の様子に七十五才の一

風の意見が添加されている可能性も十分に考えられよう。現に記事の誤りとして「其明寅の年」（貞享二年）が実は丑の年、貞享二年であったことが指摘されているし^{（注）}。又「西行物語」という浄りの三段目……五郎兵衛かたられしが……嘉太夫も五郎兵衛浄りには心おき、後に我ほこさきの甲斐になるべきは此男と云れしはさすがの嘉太夫ぞと後にぞおもひ知られぬ云々」等は、少なくとも当時の状況を伝えるというよりは執筆時の心情を述べたものであろう。

このように必ずしも事件だけを綴っているのではなく、一風の感慨をも含めていることに注目してみれば、『操年代記』があくまでも一風個人の懷古録としての浄瑠璃史であったことに気付くのである。これは決して文献として信頼を置くに足らないという意味ではない。ただ記述に関する疑問が生じた場合、一風は何故そのように判断したのかという考えに於いて説明して行く態度を忘れてはならないと思うのである。それ故『凱陣八島』が西鶴の作であるとの記述についても、あくまでも一風独自の判断によるものであったとの見方に立って考えて行きたいのである。このような考えに至ったのは『操年代記』に登場する浄瑠璃作者に関する疑問からであった。

『操年代記』の中で作者が明記されている箇所は、「西鶴作の浄瑠璃、曆といふを」が最初であり、「かいぢん八嶋、是も西鶴作にて」がこれに続いている。この二例以前には太夫の名、作品名等が書かれていても、作者については一言も触れていない。これらの次が「義太夫寅の年二の替りは近松に縁をもとめ、出世景清といへるをこしらへ」で、ここに至って初めて近松の名が見られるのである。この三例はいずれも貞享二年の加賀掾と義太夫の対決について述べられているもので、まとめると

曆||西鶴 ×賢女手習並新曆||?

二の替り

凱陣八島||西鶴 ×出世景清||近松

ということになる。何故「西鶴作の浄り、曆」に対するものが「○○作の（例えば近松）浄り、賢女の手習並新曆」ではないのか。『新曆』だけに作者名が無いことが、ひどく不自然に感じられるのである。

思うに一風はもともとこの対決に際して、どの作品も作者が誰であったのかその時点では知らなかったのではあるまいか。当時の常識（作者無記名の事）から言えば、それは当然のことであり、特に太夫が加賀掾であれば尚更であつたらう。^{（注）} 又世に近松在りと知

れた『佐々木大鑑』(注9)以前の時代であるのだから、作者について明らかにしようという動向があったとも思われない。この問題は逆に何故突然西鶴という名前が登場したのかと考えた方が自然であるかもしれない。というのは、この三例以後記述に表れる作者をあげてみると、近松門左衛門二回、紀海音、並木宗助、安田蛙文、西澤各々一回となっており(上巻のみ)記載された作品の数から言って、この人数は決して多くはないが、それでも近松以後は作者に対する興味が芽生えた頃であることから作者名が書かれて当然と考えると、近松以前に位置する西鶴の名が、非常に稀少なものであることがわかる。このように作者を知ることの困難な時代に、しかも「作者の氏神」と仰がれた近松ならともかく、およそ浄瑠璃とは縁のなさそうな西鶴の名をいきなり明示しているというのは、そこに何らかの根拠でもない限り全く冒険としか言い様がない。『操年代記』全体の記述態度から見ても、一風がいい加減なことを書くとは思われないので、一風のもとには『暦』と『凱陣八島』を西鶴作と判断する根拠となる資料があったに違いないと考えた訳である。

いったいこの資料とは何であったのか。仮にそれが現在も伝わっているものであるとしたら、一も二も無

く西鶴序を持つ『小竹集』をあげたい。何故ならば『小竹集』の考察いかんによっては、『暦』と『凱陣八島』が西鶴と何らかの関係を持っていたに違いないと思われるてくるはずだからである。

結局『操年代記』は非常に信頼すべきものであるのだが、一風すら目撃することのできなかった事件については一風も又、一人の研究者でしかなかったと見るべきであろう。そうした意味からも、一風が『小竹集』によって『暦』と『凱陣八島』を西鶴作と判断したとすると、われわれも同様に『小竹集』を考察して、一風の論に対し検討を加える必要が生じてくるのである。

『小竹集』は貞享二年七月十六日に編纂され、同年八月六日に刊行された西鶴序を持つ加賀掾の段物集である。序文はまず加賀掾の盛行を述べ、自らの加賀掾への傾倒ぶりを示し、「大竹集を求めて明暮是を見しに懷中のならざるを用捨して節章を改め小竹集に移しぬ是なん小は大を叶へる一冊也」として、加賀掾段物集『大竹集』(延宝九年)の小形化という編纂の目的を記している。

しかし実際には『大竹集』と共通するものが「平安

城」と「勧進帳」の二つしかないことから、両者は別々とみられ、一連の加賀掾自撰のものとは異なる西鶴独自の段物集であろうと言われている。以下目録を示す。

A		B		C	
同	凱陣八島	同	藍染川	同	平安城
同	よしつね道行 (貞享二年)	同	梅の名よせ (天和三年九月)	同	三杜託宣
同	くはんじん帳	同	べんの君道行 (貞享元年三月)	同	
同	花子	同	むかしかたり (天和三年九月)	同	
同	しやれ物かたり (貞享二年正月)	同	虎少将道行	同	
同	あさがを姫道行	同	風流乃舞	同	
同	ふじの十二月	同	大師帰朝 (貞享元年正月)	同	
同		同	いろはのまへ道行	同	
同		同	みさほのまへ道行 (延宝九年)	同	
同		同	てる日のまへ道行 (延宝六年)	同	

西鶴が加賀掾に傾倒していたらしいことは、その書簡からも充分に窺われ(注10) 加賀掾の語り物を集めて独

自の段物集を編纂してみようと思ひ立ったとしても何ら不思議ではない。だが、西鶴が段物集を編纂したのが後にも先にもこれだけであることを考えてみると、何故この唯一のものが貞享二年のこの時期でなければならなかったのかという疑問につき当るのである。この問題こそ解釈次第で『凱陣八島』を西鶴作と判断したり、全く別の見解を導き出したりすることの原点となり得るのではあるまいか。

すなわち『操年代記』の西澤一風は、『小竹集』刊行の年代と『凱陣八島』登場の時期とを結びつけた結果これを西鶴作と判断したのではないかと考える。それは目録を見ても明らかで、この両作が最も多くの段を出しており、しかもそれが前面に押し出されていることから、いわばこの作品を宣伝する為の段物集編纂であり、西鶴がその必要を感じたのはそれらが自作であったからに他ならない、という解釈が生まれるからである。

この考え方は一風一人に限らず、柳亭種彦も同様で、又『小竹集』を『凱陣八島』西鶴説の傍証にしておられる諸氏には一様に見られるものである。(注11)

だが、このように西鶴説をとられる方々は皆、巻頭の『暦』と『凱陣八島』のみに注意を向けられ、『小竹

『集』全体に対する考察を忘れておられるのではないだろうか。私にはむしろ巻頭の二作以外の作品にこそ、『小竹集』編纂の意義が示されているように思われるのである。というのも『小竹集』の目録を見ているうちに、この段物集が大きく三つの作品群（ABC）に分れており、しかもそれらが非常に意図的な構成を持って配列されたものであることに気付いたからである。これを更に検討して行けば、『小竹集』の刊行年時に一風達とは異なる解釈が成り立つのではないだろうか。以下三つの作品群と刊行年代との関係を考えてみたい。

まずA群。これは加賀掾の最新作である。

次にB群は、『操年代記』の貞享元年義太夫旗上げの際の演目に関する記述から見て行く。

淨るりは嘉太夫致されし世継そが、是義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になつみぬ……次のかはりあいそめ川梅の名よせ道行のすみとすぶりの濃中をはやらし、続いて三のかはりいろはものかたりの獅子の乱曲、道行のなつのゝしかのまき筆にて手習させ、其暮は堺にまかりいよいよ評判よく云々

義太夫は旗上げの年、『世継曾我』二の替りに『藍染

川』三の替りに『伊呂波物語』を次々に上演し、非常に好評を得たというのである。ここに登場した三つの作品とB群の作品とを比較してみると、全く同じものが加賀掾の語り物として扱われていることに気付く。そこでこの三作品について見て行くと、『世継そが』

は「嘉太夫致されし」の如く天和三年九月に、又『伊呂波物語』は貞享元年三月にそれぞれ加賀掾が語っていることがわかり、『藍染川』も第十三番目の加賀掾の段物集や、宝永年間の乱曲揃などに所収されていることから加賀掾の語り物であったことが明らかとなる。すなわちこの三作は、もともと加賀掾の語り物であったのを義太夫が継承したところ、非常に好評で元祖以上の人気を得たものだった訳である。

何故にこのような作品を持ち出してきたのであろうか。私はこれこそ西鶴の、加賀掾に対する愛着の表れだと思ふのである。それは、加賀掾の段物集の中にこれらを掲載すれば、人々に加賀掾の語り物であることを再認識させることになるからである。

次にC群は、『小竹集』に先行する八つの段物集すべてに必ず所収されているもので^{注12}、この二作を加賀掾が気に入っていたこともあるだろうが何よりも評判がよかったからに違いない。言わば加賀掾の代表作

である。

以上のことをまとめてみると

A 群＝加賀掾の最新作

B 群＝義太夫節として人々にもてはやされてはいいて

もともととは加賀掾の語り物であると主張

C 群＝加賀掾の作品中最も有名なもの

となるが、これが何故に意図的な構成と言えるのか。

さあ／＼宇治加賀掾の最新作だよ④。義太夫語りで大評判の世継そが、二の替りも三の替りももとを正せば加賀掾の語りもの⑤。も一つおまけにある有名なみさほのまへにてる日のまへ、これぞまさしく加賀掾の極付⑥。その加賀掾がまたまた出したよ傑作揃いの最新作⑦。やっぱり加賀掾はいいねえ

突然の変調はお許し願うとして、このA—B—C—Aの構成が明らかに宇治加賀掾その人を売り込む為のものであることを理解して頂きたい。Aを売り込むだけならばB・Cは必要とは思われないから、やはり加賀掾自身を対象としているものと受け取りたい。

ではいかなる理由から西鶴は斯くも一生懸命に加賀掾のことを世間に宣伝しなければならなかったのか。果してそんな必要があったのだらうか。こうしていよ

いよ貞享二年が加賀掾にとって、どのような年であったかが問題となるのである。

貞享二年—加賀掾と義太夫の対決の年

嘉太夫節を愛する西鶴にしてみれば新参の義太夫が次々に加賀掾の語り物を踏襲し、そのみかかえて加賀掾を凌ぐ程の評判を得て人気者になって行くのを内心面白くなく思っていたところに、この両者の対決がおこり加賀掾が敗退したということは、『操年代記』より、いよいよ義太夫憎しの感が強くなり、加賀掾を支援しようと思いついたのも当然のことと言えよう。義太夫に名実共に敗れたにもかかわらず、西鶴はそれでも尚嘉太夫節をよしとして世の人々が加賀掾を見捨てることの無いように、『小竹集』によって売り込みを図ったのではあるまいか。こう考えて序を振り返ってみると、『大竹集』というのが加賀掾自身であり、それを小形化して手元に置きたいというのは、加賀掾のことをいつも忘れさせない為にこれを作るのだというように編纂の目的がはっきり書かれていることに改めて気付くのである。

結局『小竹集』は、西鶴が加賀掾を売り込む目的で編んだものであり、それは貞享二年という加賀掾の最も不興の年に刊行されていることから裏付けられ

る。

すなわちこの解釈で行けば、『小竹集』の巻頭に挙
げているから『暦』と『凱陣八島』が西鶴作であると
する説は全く信ずるに足らないものとなる。『小竹集』
に於ける『暦』と『凱陣八島』の存在というのは、単
に加賀掾の新作だというだけで、何ら西鶴と結びつく
ものはないように思うのである。

以上敢えて一風とは異なる『小竹集』の解釈を試み
てきた訳であるが、『操年代記』にこだわらず白紙の
状態で『小竹集』に対峙した結果、そこに何ら「作者
西鶴」を見出すことができなかったということは、
「凱陣八島」西鶴」も又、確固たる根拠のある説では
なかったと言えるのではなからうか。

第三章 内部考察—序文について

第一章で正本の署名による近松説を否定し、第二章
では『操年代記』の延長線上に『小竹集』を想定した
結果必ずしも『操年代記』の西鶴説に固執することは
ないのではなからうかとの結論に至ったが、いざ次の
段階として具体的に内容を検討して行こうとすると、

どうしてもこの二人との関わりを前提としなければ、
考察が成り立って行かないというのが実情である。

そこで信多純一氏が、『出世景清』が近松の作なら
ば『凱陣八島』は近松ではない(注13)と言っておられる
ことを参考にして、『出世景清』前後の近松の作品を
数例集めて近松的傾向を知り、その中にある『暦』
と『凱陣八島』が果して近松の作品であり得るか否か
を探ってみようと思う。『出世景清』との比較という
ことであれば様々な論点が考えられるが、今回は最も
作者の特徴が出易い序文について検討してみたい。

序文は浄瑠璃の歴史が進むに従って少しずつ形式が
できあがり、近松に至って一層の定着を見るようにな
った。近松は序にかなりの重要性を感じていたらしく、
その作品には必ず、名文と言ってさしつかえない序
文が付けられているのである。たとえば『世継曾我』
は

(扱も其後)……………形式句

五月やみ峯にともしのかり衣

すそのミ草の葉ずゑまで

なびかぬかたもあらざりし

源氏の御代こそめでたけれ

のよう縁語を駆使し、短いながらもまりがあり、

……本論にかかる序詞
←

全体に滑るようなりズム感を漂わす名文中の名文である。そして「序詞十序の本論十係結び」という形式になっている。これにならって他の作品の形式を見ても。

- (1) 世継曾我（天和三年九月 加賀掾）
 - (2) 以呂波物語（貞享元年二月 加賀掾）
 - (4) 賢女手習並新暦（貞享二年正月 義太夫）
 - (6) 出世景清（貞享二年 義太夫）
 - (7) 三世相（貞享三年五月 義太夫）
 - (8) 佐々木大鑑（貞享三年七月 義太夫）
- 以上すべて「序詞十序の本論十係結び」の形式である。
ところが

- (3) 暦（貞享二年正月 加賀掾）
乾坤開萬物生形象
けんこんひらけばんぶつしやうずけいしやうゆた
かなと紀津くに序詞のみ
- (5) 凱陣八島（貞享二年正月～七月十六日以前 加賀掾）

戲言もおもひより出戯動もはかりことよりおこる
是皆人心のなせる所序の本論のみ
となっており、この二作だけが形式を異にしていることがわかる。『暦』は難解語彙の列挙で文が固く、『凱陣八島』はことわざの流用に終始し作者の創作意欲に

欠ける。両者共に短文で余韻が無く語りには不向きの感がある。等、いずれを見てもこの二作が他の六作と同年代の同人物によるものとは考えられない。

結局序文を見た限りでは、『暦』も『凱陣八島』も近松の作品ではあり得ないとの結論に至るのである。

さて、『出世景清』との比較という方向を見出した近松的傾向の考察は、まだまだ多くの課題を持っている。

だが西鶴の場合は、唯一つ西鶴作の浄瑠璃だと言われている『暦』もはっきりとした確証が無く、それとの比較だけでは確実とは言えず、結局浄瑠璃以外のところから研究を進めて行かなければならないのである。

現在、先の序文について考察した際に感じた『暦』の独特な堅さと、暉峻康隆氏が『遊仙窟』と西鶴との関係について述べられたこと^{（註）}とを結びつけ、『暦』と『凱陣八島』の中に『遊仙窟』的傾向が見出せれば、或いは西鶴作と言えるかもしれないという一つの課題を持っているがまだ結論に至っていない。

おわりに

今のところ私自身の方向としては、「非近松」が固まりつつある。西鶴については、同年代の浄瑠璃以外のものとの語彙比較等を行って行く必要があり、まだまだ方向付けまでには内部考察を進めて行かなければならない。非近松についても確証を得た訳ではないのもっと細部にわたっての研究が必要となろう。

いずれにしても、『凱陣八島』の作者究明問題にあつてこの論文はようやく一歩を踏み出したばかりである。

注

- (1) 横山 重『暦と凱陣八島と』(「川柳しなの」昭和二十八年一月)・『凱陣八島は西鶴作なり』(「新文明」昭和三十年十二月)『不札の手紙を書く』(「新文明」昭和三十年九月)

森

- 修『凱陣八島は西鶴作なり』(「西鶴研究六」昭和二十八年 古典文庫刊)・『再説「凱陣八島」は西鶴作なり』(「西鶴研究十」昭和三十三年)・『凱陣八島の諸版について』(「ビブリア28」昭和三十九年八月)

- (2) 野間光辰「西鶴」(天理図書館 昭和四十年四月)解説
饗庭簗村「近松時代浄瑠璃」(明治二十九年八月)

藤井乙男「近松全集」二 (大正十四年)

黒木勘蔵「近松名作集」上 (大正十五年)

- (3) 瀧田貞治『西鶴と演劇・歌謡』(「日本演劇史論叢」昭和十一年九月)

野間光辰「西鶴年譜考證」(昭和二十一年十月「国語

国文」)

森 修 前項(1)に同じ

- (4)、(8)、(11)「柳亭浄瑠璃本目録」文化十五年(未刊 随筆百種)十八)

- (5) 斎藤月岑 天保十年編纂 弘化四年刊(昭和十六年四月 岩波文庫)

- (6) 前項(1)「新文明」九月

- (7) 野間光辰 前項(3)に同じ

- (9) 信多純一「西鶴研究」十
「佐々木大鑑」(貞享三年七月)「野良立役舞台大鑑」による

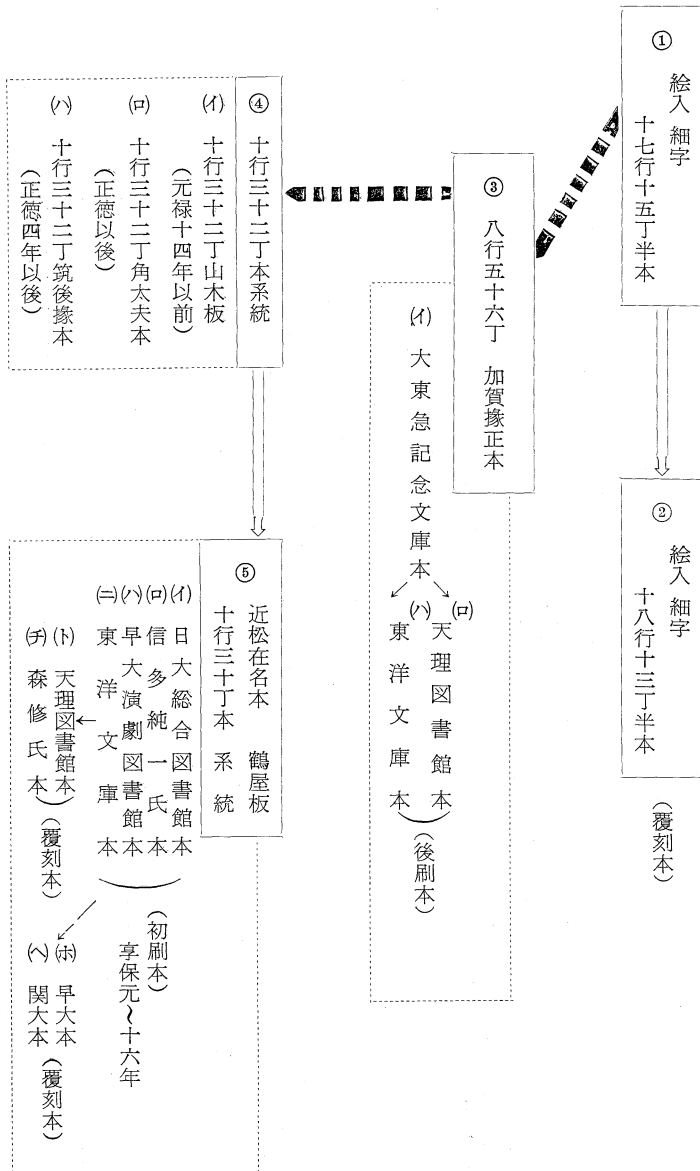
- (10) 野間光辰「西鶴第五書簡について」(「文学」昭和四十一年一月)

- (12) 「小竹集」は九番目の段物集。「大竹集」は四番目の段物集。

- (13) 信多純一 前項(7)に同じ。

- (14) 「一六八六年の西鶴——「男色大鑑」の成立——「遊仙窟」園内の三作品」(「国文学」解説と教材の研究——昭和五十四年六月)

表Ⅱ 凱陣八島諸版の流れ



表Ⅲ 凱陣八島諸本一覽表

諸 本 所 在	被見メモ (私事)	内 題	形式	奥 書 肆 の 住 所	書 書 肆	備 考
① 繪入細字 十七行十五丁半本	横山重氏本	影印本				
② 繪入細字 十八行十三丁半本	国立国会図書館本 マイクロ フィルム	かいちん八嶋 加賀操正本 かいちん屋しま				題簽 。凱陣八島本 。よつねつり 。通行 宇治加太夫本 。秋安堂寺板 。心齋橋筋
③ 八行五十六丁本	①大東急記念文庫本 ②天理図書館本 ③東洋文庫本	影印本 凱陣八島 凱陣八島 凱陣八島				。①第二十五丁欠落 。板式より三本共に山本九兵衛板と 推測されている(参)
④ 十行 三十二丁 山木板 筑後豫本 角太夫本	①東洋文庫本 ②大倉集古館本 ③横山正氏本 ④天理図書館本	凱陣八島 正本	初心粹 京二條通寺町西へ入町 慈望 大坂富麗橋式丁目 本かたり		山本九兵衛板 山本九兵衛板 山本九兵衛板 山本九兵衛板	。前書 。山本角太夫正本 。寺町竹屋下ル町 。寺町五條上ル町 。正本版元 山本九兵衛 。奥書本文の最後に 。山本角太夫の記載あり 。同じく「竹本筑後豫」の記載あり
⑤ 十行三十丁近松在名本	①日大総合図書館本 ②信多純一氏本 ③早大演劇博物館本 ④東洋文庫本 ⑤早大演劇博物館本 ⑥関西大学図書館本 ⑦森修氏本	凱陣八島 近松門左衛門作 (近江行書体)	初古 京寺町二條上ル町 江戸通油町 京寺町二條上ル町	江戸通油町 京寺町二條上ル町	鶴屋喜右衛門 鶴屋喜右衛門 鶴屋喜右衛門 鶴屋喜右衛門	初丁のみ覆刻 初丁、二丁、六丁、二十七丁、 二十八丁覆刻

。「被見メモ」の内「参考」は「西鶴研究十」森修氏「凱陣八島の諸版について」(ビブリア28)
天理図書館編「西鶴」・「近世文学資料類從西鶴編21」信多純一氏解説によった。
・奥書の形式呼称は横山正氏「浄瑠璃操芝居の研究」による。